First Trunks　～セルに殺されたトランクスの物語～

kikoumaster

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セルに殺されたトランクスの最初と最後の物語

何故、彼はフリーザ親子襲来の１年前に行こうとしたのか？

この作品はトランクスがその理由を考察してそこに至った経緯を二次創作で描いていく作品

２つ物語を考えたのですが…シンプルな方を最初に載せていきます

もう１つは時間と評価次第で…

これにて完結ですが心残りは戦闘描写が足りなかったので悟空達ＶＳ人造人間１６号、２０号の戦いをいつか描きたいと…

もしかすると後半の話と矛盾する可能性もありますが…

おまけみたいなものと思ってください

とりあえずありがとうございました

目　次

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　タイムマシン…過去より帰還せず ―― 1
第１話　２度目の時間旅行 ―― 4
第２話　ドクターと人造人間１６号 ―― 9
第３話　人造人間対策とこの世界の真実 ―― 15
第４話　人造人間１７号達の終焉 ―― 22
第５話　曇天な日々 ―― 27
第６話　人造人間を倒した世界では無く… ―― 31
第７話　３回目の時間旅行へ…そして ―― 35
最終話　セルに殺されるトランクス ―― 40
Ｅｐｉｌｏｇｕｅ　残されし世界と始まる世界 ―― 47

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　タイムマシン…過去より帰還せず

あの子がタイムマシンで過去に旅立ってから2週間が経過した。

出発の日は外せない用事があってあの子を1人にしてしまった…今はそれが後悔となって私を悩ませる。

『母さん心配し過ぎだよ…大丈夫だから…』

そう言って私を送り出してくれたあの子…

本来ならタイムマシンの時間調整は正確に設定できない為、基本的に3日程ズラして到着する様にしている（同じ時間に同一のタイムマシンと人物が存在すると何が起こるか分からない為の措置）

だからどんなにズレても1週間以内には戻ってくるはず…それが2週間も経っても戻ってこないのは何か遭った証拠。

しかし仮に何かが起こっても私には、もうどうする事もできない…

それにタイムマシンに乗ったのが、うちの息子とは限らない…

何故なら庭に落ちていた息子の服と靴、剣、ナビ付の多機能型時計、カプセルなどのあの子の着ていて持っていた物が落ちていたから…

まさか裸で乗るとも考えられないし…

それとも…

まさかと思うけど…

誰かに殺されたのか？

死体が無いから大丈夫と思いたいけど…

私は息子の部屋に意を決して入る決意をする。

ここに入るという事は息子が帰ってこない事を認める気がして躊

躇われたからだ。
それに自分も昔、両親が勝手に自分の部屋に入ってくるのが嫌だったから、同じ世代になった息子の部屋に興味はあってもね…
勝手に入るのは…

だけどもう躊躇う必要も無いから…

ガチャ
ドアノブを回して私は部屋に入っていく

部屋に入ると久しぶりに息子の匂いがする…まだこの部屋には息子の生きた痕跡を感じられて涙が出てきてしまう。
私の部屋と違って整理された綺麗な部屋だ、私はつい片付けるのが下手だから汚いのよね～この辺は父親似なのだろうか？
そして部屋を見渡すと、片付いた机の上に手紙が置いてある。

「母さんへ…」とタイトルが書いてある…

私は恐る恐る便箋を取り中の手紙を開いた…

『母さんが…
この手紙を読んでいるという事はタイムマシンにトラブルが発生したか何かしら帰れない理由が発生したんだと思う。
でなければ帰ってきた後、この手紙を処分しているはずだから、本当はこんなのは一生黙っているつもりだったのだけど…
そして母さん、2回目の時間旅行《タイムトラベル》の際に実は話してない事実があってそれも合わせて書いていくよ。
何故、自分があれほど3回目の時間旅行《タイムトラベル》にこだわったのか…理由があるんだ。

それは…』

私の息子の最初で最後の告白だった…

第1話　2度目の時間旅行

前回の時間旅行《タイムトラベル》…
エイジ764にフリーザ親子を倒して孫悟空さん達に会い、人造人間の存在を知らせてエイジ767で一緒に戦う事を約束して…
それから約1年、ようやく往復分のエネルギーが貯まり約束通り人造人間との戦いに参加すべく2度目の時間旅行《タイムトラベル》へと旅立つ。
母さんに見送られ今は時空間移動の真っ最中…

『絶対に人造人間の弱点を見つけるんだ』

この1年、人造人間達の横暴を我慢して修行して…しかしそれでもまだ自分では力不足なのを感じている。
果たして孫悟空さん達の力になれるのか?
不安もありつつ一緒に戦える戦士達がいる事の安心感を…
お父さんの戦い振りも見られて、もしかしたら協力して戦える。
そんな複雑な思いを持ちつつタイムマシンは到着した。

エイジ767　5月12日　午前9時30分
何とか30分前には到着した…戦う前に話ができるかもと…そんな期待をしつつ南の都の南西9km地点の島、アメンボ島に向かう。
島の山の方に知った気が集まっている…そのままみんなのいる山の中腹にある平地に向かう。
やはり、いた。
「皆さんお待たせしました、お久しぶりです。」
「きたか」
「久しぶりだな」
「未来から来た少年だ!久しぶり!」
「お~来てくれたか?」

ピッコロさん、天津飯さん、クリリンさん、ヤムチャさん…
ベジータさんと言うかお父さんはいないのか？
孫悟空さんと悟飯さんもいない…
「皆さんお久しぶりです…それで孫悟空さんと悟飯さんはどうしたんですか？」
クリリンさんがバツの悪そうな顔をして…
「それが例の心臓病が一昨日発症して家で休んでるよ…悟飯も残ってる。」
「え？心臓病が一昨日？…確かあの病気はフリーザ親子との戦いの後、そんなに時間もかからず発病したはず…」
発病の時間がズレた、なぜ？
「お前がくれた薬が効いたのかぐっすり眠ってる…が暫くは安静にしているしかないようだな。」とピッコロさんが補足してくれた。
「本当、薬貰ってて助かったぜ～悟空が死ななかったのは君のおかげだよ…ありがとうな」
「いえ…助かって良かったです。」
あとはこちらの未来の状況が悪化の一途を辿っていて人造人間の弱点をこの戦いで見つけたいと話をして…
見つかると良いな！と慰めてくれるクリリンさん…悟飯さんが言った通りの人だった。
僕の師匠の悟飯さんの話だとクリリンさんは歳の離れたお兄さんみたいな親戚の叔父さんみたいな存在だったと懐かしんで教えてくれたのを思い出す。
ピッコロさんも師匠としてもう1人のお父さんとして尊敬していたと言ってたし…
天津飯さんは凄く自分に厳しい人だったと…
ヤムチャさんは確か、ある戦いで先鋒で戦おうとしたクリリンさんに変わって先鋒に出て犠牲になった男気のある人だったと言ってたな…
まあ母さんから浮気者と散々言ってたからそっちのイメージが強いけど…

そんなやりとりをしているうちにそろそろ１０時か…
すると1台のエアカーがこっちに向かってくる。
「何者かがこっちに向かってくる…邪悪な者ではない」
「あれってヤジロベーのエアカーじゃないかな？」
ヤジロベーって誰だ？
「うへ～間に合ってよかった～」
エアカーから降りてくるのは太った人だった…誰だろう？
「ほれ～カリン様から差し入れだ～仙豆だぎゃ」とクリリンさんに渡して
「お～カリン様、流石だな、ヤジロベーもありがとう」
「そんじゃ～頑張ってちょ～よ」と言ってエアカーに乗って去ろうとしてる。
「え？一緒に加勢してくれるんじゃないのか？」
「俺はお前達のような馬鹿と違って死にたくなにゃだよ～いちいち付き合ってられっか」と言い残しエアカーで去っていく。
ヤジロベーさん…母さんから聞いてないがあの人も戦士なんだろうか？

その去っていく光景を皆んなで見ていると…
天津飯さんが
「妙だとは思わんか…１０時はとっくに過ぎているのに、敵の気配が全く感じられない」
え？気配って…あ、悟空さんに言うのを忘れていた。
「あの…気配はありませんよ、人造人間なんですから気を感じる事はないです」
「何？気配、気が無いだと、本当か…それは…」
「ええ～ありません…そのすいません、悟空さんに言っておくのを忘れてました」
「「「……」」」
皆、そんな大事な事なんでもっと早く言わなかったんだと言いたそ

うな顔になっていた。
「まあ仕方がない～この際、その人造人間の特徴を教えろ！」
と言う事で人造人間の特徴を教えていく…
・背は殆ど同じの２人組でレッドリボンのマークが入ってる服など着てる
・長い黒髪の少年で首に赤いスカーフを巻いている
・金髪の可愛い女の子タイプで服装は僕みたいな恰好で２人とも耳に丸いリング付けている
・エネルギーは無限
「女の子タイプかよ…」
クリリンさんは残念そうに呟く。
「エネルギーは無限か…厄介そうだな。」
ピッコロさんは難しい顔をしながらもその厄介さを理解しているようだ。

そして時間は１０時３０分を過ぎて人造人間は一向に表れる気配すらない。

「なあ…日時は間違いないんだよな？」
「はい…記録ではエイジ７６７　５月１２日の午前１０時頃に現れたそうです。」
時計を見ながら説明する。

そして１２時過ぎても騒ぎも起きずに時間だけが過ぎていく…

『おかしい…何で現れないんだ？…それも歴史がズレてしまったのか？』
僕は多機能時計のデータを見ながら…
「すいません、皆さん…もしかしたら僕が過去でフリーザ親子を倒してしまったのがいけなかったのかも…」
僕は敵が現れない原因を推測して語る。

「まあまあ…仕方がないさ～それよりここで待つよりどこかに移動しないか？」
クリリンさんは僕を慰めつつ提案する。
「一度、カメハウスで待機するか？」とヤムチャさん
「いや～ブルマさんのところへ行きましょう…あの人ならドクターゲロの情報を何か知ってるかもしれないし…」
クリリンさんが提案してくれる。
「そうだな…行こう」
ピッコロさんはクリリンさんの提案に賛成する。
5人は西の都のカプセルコーポレーションへ向かう。

空を移動中…落ち込む僕を…
「まあそんな落ち込むなよ～君が薬を持ってきたおかげで悟空は死なずに済んだんだからさ」
「ありがとうございます～クリリンさん」
クリリンさんってやっぱり凄く良い人だな…
「しかしどのみち超サイヤ人になれるのがこの少年しかいないからな…人造人間の強さが分からない以上、慎重に事を進めなければいけないかもしれんな」
ピッコロさんは呟く…
「…」
天津飯さんとヤムチャさんは難しい顔をしながらピッコロさんの発言を聞いていた。
せめて悟空さんが動ければと思うが、あとどれくらいで戦えるようになるかは分からない。
そのまま西の都に着いて母さん…ブルマさんの元を訪ねるのであった。

第2話　ドクターと人造人間１６号

カプセルコーポレーションに着くとブルマさんは出迎えてくれた。
「君～久しぶりね…皆んなも元気そうで良かったわ、それでもう人造人間を倒したの？」
「いえ…実は」
ブルマさんに事情を説明する。
「ドクターゲロの研究所か…一応お父さんにも聞いてたりして調べているけどね。アイツの研究所は北の都の山の中にあるって噂よ…流石に正確な位置はわからないけどね」
「よし明日調べに行くか」
ヤムチャさんは拳を掌でパシッと叩きながら…
「そうだな」とみんなは頷く。
ブルマさんはその話を聞き
「部屋なら沢山あるから好きに使って休んでちょうだいね…ヤムチャは別に自宅が近くにあるんだろうけど好きにしていいわよ。」
「ああ、わかったよ」
ヤムチャさん少し戸惑いながら答えた。

ＴＶ等のニュースを見たが…結局、アメンボ島はあの後、何も事件は起こらなかったようだ。
僕たちは用意された食事を頂いて、用意された部屋で早くにベッドで寝ながら…
悟空さんの心臓病の発症と人造人間が現れ無かった、歴史のズレばかりが気になって他の事に頭が働かなかった…
その為か、夜もあまり眠れなかった。

翌日、朝から出発して北の都の山の中をみんなで白み潰しに探す…
そして半日もしないうちに謎の大きな扉がある場所をクリリンさんが発見する。

連絡を受けて集合してみんなで扉の前に来て…
「ピッコロ…どうする？突入するか？」
クリリンさんが確認する。
「やはり強い気を感じないな…だが微かに人がいる気配はする。」
天津飯さんは気を探ってみんなに伝える。
「どのみちこのままいても仕方がない。」
ピッコロさんは怖い顔をしながら突入しようと身構える。
「突入するのか？」
ヤムチャさんは少し難しい顔をしながら尋ねてくる。
そうこうしているうちに突然扉が開いた。
僕達は身構えてしまうが…

1人の大男が出てくる。

「お前達は孫悟空の仲間だな…用があるなら中に入れとドクターが言っている。」
その大男は髪の毛をモヒカンにしてプロテクターみたいな服を着て胸にはレッドリボン軍のマークが…
人造人間か？
「ドクター…ゲロ？」
ピッコロさんが聞くと…
「違う」
違う？ドクターゲロではないのか？
「お前は…人造人間なのか？」
天津飯さんは気を感じない相手に確認する様に問う
「俺は16号だ」
そう言って彼は中に入って行った。
「あんな人造人間は…知らない…16号？」
僕は頭が混乱してきた…3体目がいたのか？
「どうする？入るか？」
恐る恐るピッコロに訪ねるクリリンさん

「ああ…油断するなよ」
「了解」
クリリンさんは覚悟を決めた顔で返事をする。
「分かった」
天津飯さんも…
「帰りてえ…」
ヤムチャさん…
「…はい」僕も覚悟を決める。

中に入っていくと…

中は大きな人が入るぐらいの大きなカプセルが並んでいて16、17、18と数字が書かれていて手術するような大きなベッドもある。
そして部屋の中央に机があってそこに座る女性が振り向いて…
「ああ、いらっしゃい～君達は孫悟空のお仲間だね…確か、緑の人がピッコロ大魔王で三つ目の子は天津飯、鼻がないのがクリリン…あと君はヤムチャだったけ？
あと…そこの剣の少年は初めて見るね～
私はドクターボミ…ゲロ先生の助手だった者だよ～よろしく」
女性は立ち上がりながら
「16号～皆さんにお茶を出してあげて～」
「分かった」と奥の部屋に引っ込んでいく
皆んな呆気に取られ無言になってしまうが…
「ゲロの助手だった？」
ピッコロさんが問うと…
「ああ…ゲロ先生は亡くなったよ約2年前にね」
「亡くなった？」
「私もつい半年前に訪れたらほぼミイラみたいな姿で机に座って亡くなっていたよ」
腐敗も凄くてね～本当大変だったよと軽口を叩くドクターボミと名乗る女性

見た目は２０代で眼鏡をかけて美人な女性……なのだが醸し出してる雰囲気が不思議な人

そして俺は疑問に思ってる事を質問する

「すいません１つ質問があるんですが…」

「ん？何だい？剣の少年～」

「黒い長髪の少年と金髪の少女の人造人間は存在するんですか？」

「!?…へぇ～これまた凄い質問がきたなあ」

驚いた顔をして僕の顔をマジマジと見てくる…まるで母さんみたいな人だな…

１６号が戻ってきてドクターは持ってきたコップを受け取りながら～あ、毒とか入ってないから大丈夫よと毒見してから渡そうかと色々言ってきたが今更と思い僕が受け取り飲むとみんな（ピッコロさん以外）は受け取って飲み始める。

「彼らなら北の都の病院で入院しているよ…冷凍睡眠装置で長く眠ってたからね～ゲロ先生が施術を行う前だったからまだ人造人間ではないけど…」

「今、現存している人造人間はそこの１６号だけですか？」

「質問が２つなんだが…まあいいか～そうだよ、１５号までは処分しててその少年達が１７号、１８号になる予定だった…らしいよ」

「そうなんですか…」

「今度はこっちから質問いいかしら？」

僕の顔を覗き込むように聞いてくる。

「はい」

「何で君は１７号達の事を知ってるのかな？

それにゲロ先生の研究室まで知ってて…

まるでゲロ先生が孫悟空に復讐する予定だった事を知ってるみたいな？」

「…」
「質問を変えようか～
剣の少年、君は何者なんだい？
色々知ってるようでまるで知らない…
けど、まるでゲロ先生の頭の中を覗き見してるような…ん～違和感が物凄く感じるなあ～」

「それは…僕が未来から来たからです…」
「?!…へえ～それを信じろと？…とまあ普通に思うけどね～色々知ってて知らない…辻褄は合うかな～」
どのみち、もうここまできたら本当の事を喋っても大丈夫だろう…
僕は自分の正体を名前と父さんと母さん以外を語る
本当の歴史だと昨日、アメンボ島で２人の人造人間が暴れてそれ以降、戦士達も亡くなり人口は全世界で数万人にまで減って自分１人だけで戦っている事…
自分の出生だけ省いてタイムマシンで過去に来て人造人間の倒し方を探る為にきたことを語る。

「なるほどね～人造人間１７号、１８号が暴れ回って地獄のような世界になってるんだね…そしてそれを止める為の手段を探しにきたと…剣の少年」
「はい」
ピッコロさんが
「ドクターボミとか言ったか…お前は孫悟空に恨みは無いのか？」
「え、無いよ…ゲロ先生は孫悟空を殺す為にずっと研究してきたけどね…私は殆ど腐れ縁みたいなものだしね」
「腐れ縁？」
「まあ…ね…私見た目はまあまあ若いじゃない…でも実は本当は６０を超えてるんだよね」
「「「「え?!?」」」」
「私の専門はバイオ工学でね…実は遺伝子と細胞増殖によって身体を

改造しているのよ」
　まあだから私も立派なマッドサイエンティストだよねと語る…
「別にゲロ先生とは夫婦では無いけど卵子は提供しててゲロ先生が人工子宮を使って作ったのがゲロ先生の息子さん…レッドリボン軍の上級兵士だったんだけど亡くなってね」
「…」
「で～そこの１６号はその亡くなった息子さんをモデルに作ったらしいんだけどね…まあ性格が戦闘向きではない為、この子も長く封印されてたのよ…まあ片付けで人手が欲しかったから私が目覚めさせて働いてもらってるのよね」

第3話　人造人間対策とこの世界の真実

ゲロとボミと人造人間１６号の奇妙な繋がりに驚いていると…

ドクターは俺を見ながら

「さて～剣の少年は人造人間を止める為の手段が欲しいのよね…」

僕の顔を見ながら聞いてくる。

「はい」

僕は素直に答える。

「分かったわ…ちょっと待っててね～」

そう言うと奥にある部屋に入りガタガタと何か漁ってる音がする。

その会話を聞いていた一同は…

「なあ～ピッコロ…この連中、大丈夫だと思うか？」

クリリンさんが不安そうな顔で聞く

「そうだな…１６号以外は問題ないのかも知れんがな」

「…」

ヤムチャさんは何も言わない。

「このまま何もなければ特にこちらから手出しする必要はないかもな」

天津飯さんは提案する。

「少年…君はどうする？」

クリリンさんが心配そうに尋ねてくる。

「僕もドクターの話を聞く限り危険性はないと思います。」と率直に告げた

「あ～あったあった～コレコレ～はい剣の少年にプレゼント」

設計図らしい紙束と何かの無線コントローラーのような形状の代物を渡してくる。

「これは？」
「１７号、１８号の設計図と緊急停止装置のコントローラーよ～多分未来の人造人間も同じもの使ってるだろうからこれを使えば問題ないでしょう。」
「え…いいんですか？」
　受け取りながら尋ねる。
「処分しなくて良かったわ～どのみちいつかは廃棄するつもりだったしね～」
「ありがとうございます」
　僕はドクターにお礼を言いながら、ようやく見えた人造人間の解決方法が見つかった事に身体が少し震えた。
「ほかに用はあるかな？」
　ドクターボミはその他の皆んなを見て告げる。
　ピッコロさんが
「１６号はどうするんだ？」
　ドクターは暗い顔をしながら…
「あ～彼はここでの用が無くなったら本人の希望で封印するわ。それが１６号の願いだしね。」
「……」
　皆んなは一様にそれぞれを見ている。

「それでいいのか…１６号は？」
　クリリンさんが心配そうに尋ねる。
「ああ…俺の身体に埋まってる爆弾を取り出さないといつか間違えて地球を壊してしまう可能性があるから…」
　１６号は淡々としかし危険性があると言う事でやはり封印を望んでいるようだ。
「ドクターが取り出せないんですか？」と尋ねると…
「言ったろう～私はバイオ工学が専門でロボットとか機械関係は無理だしね～封印するぐらいしか手がないし…」
「あの…カプセルコーポレーションのブルマさんに頼めば何とかして

くれると思うんですが、設計図とかあれば多分問題ないかと」と僕は提案する。
「…でも私には伝手がないしね～そっちで口聞いてくれるんなら頼みたいところだけどね～」
そこで電話にて話を聞くことに…

何回かの呼び出し音の後、出てくれたのでブルマさんに事情を説明する。
『つまりその人造人間の中にある爆弾を取り出せばいいのね？』
『はい…ブルマさん、頼めますか？』
『大丈夫よ～父さんにも頼んでおくわ』
『ありがとうございますブルマさん』

こうしてドクターゲロの研究所での用事が終わり１６号も一緒にカプセルコーポレーションに行くことになった。
「ドクターボミ…ありがとうございました。」
「まあ～気を付けてね～剣の少年」
「はい」

カプセルコーポレーションに着くとブルマさん達はすぐに人造人間１６号の爆弾を取り出す作業をしてくれた。
「凄いな…ドクターゲロは何とも勿体無いのう」
「そうね…この技術だけでも世間に公表すればお金持ちになる事も名誉も思いのままだったんじゃ無いかしら…」
３時間程で爆弾を撤去して作業を終わらせたようだ。

そして一緒に１７号達の設計図とコントローラーを渡してあって
「一応、設計図とこのコントローラーを調べたけど～多分人間ベースに使ってる少ない装置が停止に関係あるんじゃないかな…一応使い方の詳細はメモ付けておくからね」
「ブルマさんありがとうございます」

受け取りながらお礼を言う
「お安い御用よ～そう言えば君はいつ帰る予定なの…せっかくだし帰る前にパーティーしましょうよ。ちょっと早いけど未来の人造人間を倒す希望が見つかったんだもの～」
「え…いいんですか？」
「勿論よ！」
ブルマさんはやっぱり僕の知ってる母さんそのものだった…
その日、お別れパーティーを行い…

次の日…
「皆さん…本当にありがとうございました。
必ず人造人間達を倒して平和を取り戻します！」
クリリンさんや天津飯さん、ヤムチャさんなどお世話になった人にお礼を言う…
悟空さんはまだ寝てる為、悟飯さんに電話で前の日に話してお別れを告げた。
どうか悟飯さん…平和な世界でなりたかった学者になってください…
ちなみに１６号は爆弾を取り出すとそのままドクターの元に帰る事になりブルマさん達と協力してドクターゲロの残した遺物を処分する事に…
１６号はこの作業が終われば地球の自然を守っていきたいと言う事で森林警備隊に所属する事になっている。
１７号、１８号になる予定だった少年少女はカプセルコーポレーションで引き続き世話するそうだ。
記憶の混濁が見られ社会復帰もまだまだ先だそうだ。

そしてドクターボミは…
カプセルコーポレーションのアドバイザー（ブルマさんがボミの年齢を聞いて即雇う事に）となってバイオ関係に携わる事になるそうだ。

そして僕は…
「ブルマさん…ありがとうございました」
「うんうん～元気でね」
僕の手を両手で握ってくれる…

僕はブルマさんに告げなければと…
「…トランクス」
「え？」
「僕の本当の名前はトランクスです…どうかブルマさんお元気で…」
「そう…トランクス…トランクス…何だろう、凄く良い名前ね～もし私に息子ができたら付けてみたい名前ねと言うか付けるわ！」
「ははは…では…お元気で…」
僕は最後はブルマさんを見られないままタイムマシンに乗り起動…

マシンは空中に上がりながら僕は最後に上空から下を見ると…
みんなが手を振ってくれてる～
僕も手を振り返してマシンは時空間内へ突入する。

時空間移動中
ピッコロさん…
僕は昨日のお別れパーティーの時の事を思い出す。
『トランクス…ちょっといいか』と僕の耳に聞こえるぐらいの小さな声で囁く
『え？ピッコロさんがなんで…』
僕は突然の名前呼びに驚いて固まるがピッコロさんは誰もいない外のバルコニーに歩いていく。

他のみんなは談笑してるのか？僕とピッコロさんの行動には特に

気にしてなかったようだ。
　僕は同じバルコニーへ向かう…
『すまんなトランクス…3年前に孫悟空との会話を盗み聞きみたいな事をしたからお前の名前と出生を知ってる…』
『…そうだったんですね～いえ特に気にしてませんので…』
『そうか…』
『それでピッコロさん…何か用があるんですよね？』
『トランクス…お前、悟空の心臓病のズレや人造人間の件で、余りにも想定外の事が起きて頭が混乱しているから気が付かなかったようだが大丈夫か？』
『え…』
『ベジータの事だ』
『あ…』
『やはりな』
『すいません…すっかり…』
　そう完全に忘れていた…父さんの事を…
『俺も言いそびれてな…それでベジータの事なんだがな』
『…』
『アイツは2年前の修行の最中に事故が起きて…亡くなったんだ』
『え…え……』
　僕は突然の衝撃に頭が真っ白になってしまった。
『だから分かると思うがな…ベジータとブルマの間にお前は産まれていないんだ』
『…う…そん…いや…まさ…』
　僕が産まれていない…そういえば全然、この家には僕の痕跡がまるでない…ないんだ…そうか僕はこの世界では存在しないんだ。
『トランクス…お前に告げるかどうか悩んだんだがな…知らないまま去って行くのも忍びなくてな…』
　ピッコロさんは申し訳なさそうに顔を俯かせている。
『……その…ピッコロさん、教えてくれてありがとうございます。』

僕は何とか顔を向けてお辞儀してお礼を言う…
『元気を出せとは言えないが…すまんな』
ピッコロさんはそう言って空へ飛んでいく…

孫悟空さんの心臓病の遅れ、ドクターゲロの病死、人造人間１７号
１８号が存在してない、１６号が代りに存在する…
そして父さんの死～それに伴う僕の誕生が無い事になった事
僕はあの世界に存在すらしていない…
じゃあ…
あの世界のブルマさんは僕の母さんでは無いんだ
僕は…

僕は…何でここにいるんだ！！！
コクピット内で俺の慟哭が響く…誰も答える事無くタイムマシンは未来へ戻っていく…

第４話　人造人間１７号達の終焉

「ここは…どこだ…俺は…」
自分の目の前には夜の星が瞬いてる…
確か…
さっきまでの記憶が曖昧だ…
いや…そうだ！
あいつに会ったんだった…
あのいつも無駄な努力で突っかかってくる単細胞
名前はトランクスだった…そうあいつが久しぶりに俺の前に現れたんだった。
そして話をしていたら…
そこからの記憶がない、と言うより何故俺の身体は動かない？
目と口は動くが手と足、いや身体もまともに動かせない…
何がどうなっているんだ？

「目が覚めたか１７号」
「その声はトランクスか？」
「ああトランクスだ」
「お前、どこにいるんだ？出てこい！」
やはり顔が動かない…
「今、その角度だと見えないんだな～ここだよ１７号」
そういうとトランクスが視界に入ってきた。
「貴様！俺に何をしたんだ！」
「これだよ１７号」
トランクスの手にあの忌々しいコントローラーが握られていた。
「何故、お前がそれを持っているんだ!?それは確か破壊したはずだ！」
「これはその１８年前に行って貰ってきたんだよ…ドクターゲロの研究所で…」
「…何を馬鹿な事を～適当抜かしてるんじゃない！」
「タイムマシンで１８年前に行ってドクターボミって言うドクターゲ

ロの助手って人から貰ってきたんだよ」
「何を…」
「１７号の頭では理解できないようだな。」
「貴様、馬鹿にするのか！」
「ああ～そのつもりだ」
「まあ普通、今の状況を知るべきだな…」
「貴様！恥ずかしく無いのか!!卑怯者!!」
「ああ…確かにな…本当に自分の実力だけでお前達を倒したかったよ…悟飯さんの仇であるお前達を…
だけど僕のプライドよりも大事な事がある！お前達を止めて世界を平和にする!!
それこそがどんな事より大切な事…だからお前達はここで終わらせる…」
「…くそ…はっ！１８号はどうした？まさか…」
「ああ…１８号はお前の隣にいるよ」
「１８号！くそ顔が動かない!!」
「そう心配するなよ…ほら１７号」
俺は奴の目の前に１８号だったモノを胸の上に置く
「…１８号!?貴様!!このド外道が!!」
顔には恐怖、苦痛と様々な表情で固まっていた１８号だったモノが…
そして顔を見るだけでそれまでのイメージとは異なる表情を見せる１７号
「お前でもそんな顔するんだな～同じ人造人間だからか？仲間意識？」
「１８号と俺は双子の姉弟だ！」
「…そうか…それは知らなかったよ」
「貴様!!」
「１番に目覚めてうるさかったんで…僕は女性を痛ぶる趣味は無いんでね…早々に息の根を止めたよ」
「き、貴様！」

「それでもこれまでの罪を償わせるつもりだったから手と足を削って苦しめてからトドメを差したよ」
そう言うとトランクスは手に持ってた部品を見せる
それはジェネレーター…人造人間にとって心臓ともいうべき大切な部品
「爆弾があるのは知ってたからね…無力化してから抜き出したよ…痛かったんだろうな…あんな驚愕なそして悔しそうな18号は初めて見たよ」
「…ぐっ…くそっ」
「さて次は17号…お前の番だ…18号よりは苦しめてから死んで貰う…何か言いたい事はあるか?」
「…俺と勝負をしろ!そんな勝ち方で悔しくないのか?卑怯者!」
「…ああ、その手には乗らないよ…僕では倒せない可能性があるからね…今はこの地球を平和にする事だけしか興味がないから…だから苦しんで死ね!」
指先から小さな気弾を発射するとボワッと火が燃え上がる
「感謝しろ…一緒に燃やしてやる…今のお前達は普通の人間と変わらないからな」
くそ
動け
殺してやる
熱い
痛い
…
俺は気絶している17号の顔に水かけると目が覚める
しかしもう言葉にならない
殺…せ
苦…い
熱…
ぐ…
また水をかける

しかし意識が朦朧としているのか?
仕方がなくコントローラーのスイッチを押すと…
ぐ…
ぎ…
あ…
痛みでまた意識がはっきりとしたのか?しかし言葉にならない声で呻いている。
…
…
…

(もう意識がないか?)
気がつけば日が上り初めて辺りが明るくなっていく…
結局、6時間近く付き合ってしまった
身体が炭化したのかもうこれがアノ人造人間とは誰も思わないだろう。

僕は出力を抑えて気弾を放つ!
炭化した身体も木片も吹っ飛んで残ったのは17号に残った部品のみ…
僕はそれを拾い上げてようやく全てが終わった事を実感する…
この部品は母さんに渡して何かの役に立つか分からないけど無駄にする事はないだろう。
バシュー!
ドカーン!!
空中に上がり最後にもう一度気弾を放つと辺り一帯を吹き飛ばす…

ようやく
しかしスッキリしないまま長年の問題が解決した日であった。

暫く土煙で吹き荒ぶ地上を見つつ母さんのところへ帰っていくのであった。

第５話　曇天な日々

「我ら！ネオレッドリボン軍に退却の２文字は無い!!進め、抵抗する者達は虐殺だ!!!」
　追い詰められた我々を戦車、戦闘車両、歩兵が少しずつ近付いてくる…

「くそ…ここまでか…悪魔《人造人間》がいなくなってようやく平和になったと思ったのに…」
　街のまとめ役として復興に力を入れ始めて少しずつ人並みの生活が送れるようになったと言うのに…
　近くの街から避難民が助けを求めにきたとほぼ同時に襲いかかってきた愚連隊《ネオレッドリボン軍》…
　何とか撤退に撤退を重ねて街の奥まで逃げて生き残った住民達と自警団…
　最早、抵抗しようにも手持ちの斧や鍬など武器ですらない…
　儂等老人や障害者は処分されるだろう…若い男や女性達は…
　考えつく限りの悲惨な未来しか思いつかない。
　そんな悲惨で絶望の中、それは起きた…

　突然、奴等の車両や悪人が吹き飛ぶ風景が繰り広げられていた。
「あ!?天使様だ！」
「正義の戦士様だ!!」
「金髪の戦士様だぞ！」

　我らと悪人の間に…空中に金色に輝く天使？
　羽根は無いが空に浮かんでいる…
　私には天使どころか神様に見えてきた男性が空中で手を振るう度に吹き飛ぶ悪人達…
「天使モドキだぜ!!殺せ!!!」
「パツキン野郎め！撃て！撃て!!」

彼等はただ空中にいるアノ方に大砲や機関銃、ミサイル、バズーカ、拳銃など手持ちの武器を一斉に撃つ…
が…
何故か吹き飛ぶのは悪人達だった。
抵抗が無くなり中には逃げる悪人には容赦なく天使様からの光の矢のような物が飛んでいき悪人達の頭、足や手が消し飛んでいく…

これは天罰だ…
私はいつの間にか手を合わせ膝をつき天使様に祈っていた。
天使様は地上に降りて抵抗する者には容赦の無い罰を下して悪人達を無力化する。
そして再び空中に上がり去っていった

そこからは立場が逆になり生き残った住民達が悪人達を殺していく…
「アンナをよくも!」
「パパの仇!!」
「息子をかえせ!!」
私はその行動を止める事はできなかった…
私ですら手に斧を持って…
「天罰だ…死ね!」
そう言って私は斧を悪人の頭に振り下ろす…何度も…何度も…

それから死体を集めて燃やし数時間後、西の都から救援隊がやってきて私達はようやく人に戻った気がした。

噂で聞いた事はある…人造人間がいた時にも金髪の戦士が戦っていたと…
そんな彼ですら倒す事の出来ない人造人間だったが、それでも彼らが戦う事で多くの人が逃げる時間を作ってくれた事でいつしか『金髪の戦士』『黄金の戦士』『正義の戦士』…または単純に天使と呼ぶこと

もあった正体不明の人だが…
人造人間がいない世界で彼は再び現れこうして見返りを求める事無く助けてくれる…まさに天使、聖人、神様と呼ぶ者も多い…

この世界にはもう神様がいないのであろうか？
アノ方が神様ならどうか我らに救いを…

『母さん、救援ありがとう』
「まあトランクスの事だから心配はしないけど…大丈夫？」
『ああ、大丈夫だよ』
「あなたは自分の出来る範囲で助けてるんだからね…サポートぐらいは任せなさいって！」
『分かってるよ、ありがとう母さん…最後に一回りしてから家に帰るよ』
「うん…気をつけてね」
そう言うと通信機の表示が消えた。
私は今、別の町で復興支援で赴いている…ここ1月程、息子の顔を見れないほど忙しい。
それでも通信がこうやってやってきて救援などのサポートの為ではあるが話ができるのは嬉しいし頑張ってるんだなと気合が入るけど…
「はあ…何で世界はこうも複雑なのかしら…」
トランクスが人造人間達を倒してから半年。
ようやく世界は復興に向けて前進していた…のだが、それに呼応するかのようにレッドリボンの残党を名乗るネオレッドリボン軍や元軍人、裏世界の住人たちが復興してきた町や村に現れ始めた。
未だに無政府状態故に警察や軍隊が機能してない世界なので町や村、毎に自衛しなければならない。
当然、トランクスは西の都や近隣の町や村に赴いては、そういった

悪人達を排除していく…それでもトランクス1人の為、生存している人達、全てを助けるのは困難を極めていく。
私も各地の町や村の復興のために寝る間も惜しんで活動しているが…
まるで雨後の筍の様に出てくる悪人達が今、もっとも頭を痛めてる事案なのである。
人造人間を倒してからのトランクスは以前と変わらないように見えるが実際は違う…これまで悪人といえども人間を傷付ける行為は悟飯君の教えのおかげだったのか?と今は思うほどに辛辣になってしまった。
救援に赴いたスタッフから報告を聞くとね。
悪人達に容赦のない攻撃は勿論、その後の生き残った住人たちがそんな悪人達を殴殺している報告を聞くと…どこかで仕方がないと思う反面、何とかこの事態を収拾したいと考える自分がいる。
(早急に新政府の立ち上げも考えないといけないかしらね〜)
まだ地獄は続いていく…
今はそんな日常がこの世界の当たり前となっている。

(孫くんがいたらまだ救いはあったのかしら…もしベジータが生きてたら少しはトランクスの負担も少なかったのかな?…悟飯君、クリリン君…みんながいない事がこんなに重く伸し掛かるなんて想像もできなかったな〜)
いつしか自分が立ち止まってるのに気づいた…
「もう!らしくないことは考えない!!」
私は両頬を叩いてそう言い放つと次の仕事の案件にかかるのであった。
まだ生きている私達が亡くなった人達の分まで頑張らないと…

第６話　人造人間を倒した世界では無く…

「ポポさん、こんにちは…」
　神様の神殿の玄関に着くと何時もの様にポポさんが佇んでいた。
「そろそろ来ると思ってた…お腹すいてないか？ポポ、ご飯作るぞ！」
「はは、ありがとうございます…お腹空いてないんで大丈夫です…今日も良いですか？」
「勿論、後でお茶持っていく」
「ありがとう…ポポさん」
　僕は最近、神様の神殿で佇むことが多くなった。
　最早、神様もいない神殿だが一度、悟飯さんと来た時に紹介されたミスターポポさんがいる事を思い出し、人造人間を倒した報告がてら挨拶に行くと…
『ポポ…トランクスが倒したの知ってる…きっと神様、孫悟飯達も喜んでくれてる』
『…そうでしょうか？』
『きっと喜んでる…トランクス、神様に変わって礼を言う』
『ありがとう～ミスターポポさん』
　それからたまに神殿に来るようになった。
　神殿の淵に座る…下を覗くと遥か下に地上が見える。
　ここにいると少し落ち着く…
　何故かは分からないけど、何か悟飯さんが近くにいるようなそんな気がして…

「トランクス、お茶持ってきた」
「ポポさんありがとう」
　お茶の入った茶碗を貰い一口啜る。
　温かいお茶で身体と少し心が温まった気がした…
「最近、忙しそうだな…」
「ええ、そうですね…なかなか忙しいですね」
　その後、お互いに無言となっていたが…

「…あのポポさん…」
「どうした？」
「人造人間を倒したのに、人は変われないんでしょうか？
あれほどの地獄を生きてようやく平和になったのに…
人は悪の心は消す事は出来ないんでしょうか？」
ここ最近の悪人達の行動が理解できないからだ。
「神様も神様になる前は悩んでいたと言ってた…
悪の心は決して無くならない。
どんなに修行しても消せなかった…
だから悪の心を分離して神様になれたと…
でも神様、言ってた…その分かれた心を消すのではなく向き合う事が大事だったと…
だからピッコロは大魔王になってしまったと…
でもピッコロは悪の心が減っていった…
孫悟空と戦い、孫悟飯と共に修行して…
それ見て、心と向き合う事でいつかは無くす事ができたかもしれないと…
神様言っていた。
ピッコロ大魔王の生まれ変わりだったピッコロは孫悟飯を庇って自分を超えたと…
だからトランクス…悪の心とは向き合う事でしか無くならないのかもしれない…」
「悪の心か…（ピッコロさんが確か悟飯さんを庇って一度亡くなったんだな…お父さんがまだ悪人だった頃だったか）」
父ベジータは地球を侵略に来た悪い宇宙人だったと母さんが言ってたな。
ナメック星でのフリーザ一味との戦いで共闘したのがきっかけで地球に来て、そして何故か母さんと結ばれて僕が産まれたと…
母さんはお父さんは悪人だったから今頃、地獄だろうとは言っていたけど…

お父さんは悪の心と向き合ったことがあるんだろうか？
少なくとも人造人間達に立ち向かったんだから改心したんだろうか？
この前の時間旅行ではお父さんは亡くなっていて、結局1番最初の時間旅行で会ったのが最後だったな…
会いたかったな…
もっと話をしてみたかった…

「ポポさん、新しい神様って誕生しないんですか？」
「まず候補者が神殿に来て、最後に神様になる儀式を達成すると神様になれる。…いつか神様の候補が神殿に現れるまで、ポポ待つ」
「ドラゴンボールは…復活できないんですよね？」
「あれはナメック星人でないと使えない」
そう言えば悟飯さんが言ってたな～またナメック星人の誰かが地球の神様になってくれればドラゴンボールが復活するかもしれないと…
でもそれは思っても仕方がない事だ…新しいナメック星が何処にあるのか分からないそうだし、仮に見つけてもそこまで行く宇宙船を作らないとダメだろうし、何より地球に来てくれる人がいるかどうか…
「もしこの世界に人造人間が現れなかったら…世界は平和だったんでしょうか？」
「それ、ポポには分からない」
そうだよな…今回だって母さんが人造人間を倒した世界があって良いって発想でタイムマシン作ったんだよな。

ん？…
もし…
もし…人造人間が存在しない世界が作れたとしたら？
孫悟空さんは心臓病で亡くなるけど、ピッコロさんも死なないから

神様も死ななくて…そして他の仲間の人達も…
そして悟飯さんも戦わなくて良いから学者になっていたかも…
ある意味、この前行った世界は人造人間が暴れていない世界だから理想的な世界かもしれない。
でもお父さんが亡くなって僕が産まれなかった
お茶を飲みながら考え事をしていると…

ピピピー!!
携帯時計から音が鳴る！
応対する為に、スイッチを押す。
「トランクス聞こえる？K地区の町が襲われてるみたいなの行ける？」
母さんからの緊急通信だ。
「勿論、すぐ行きます!!」
通信を切ると立ち上がり
「ポポさん行ってきます!!」
ポポさんに茶碗を渡すと、僕は超サイヤ人になって神殿から飛び出していく。
「頑張れ」
ポポさんの微かだが応援の声をかけてくれたのが聴こえた。

スピードを上げ現場に向かう…少しでも助けることができるのなら今は全力で守る。
悟飯さんが生きていたら、同じ行動をするはずだ!!
一筋の黄金の光の矢になって飛んでいく…

第7話　3回目の時間旅行へ…そして

「トランクス～あと3日でエネルギー充填が完了するわ」
どうやらタイムマシンの往復分のエネルギーが溜まったようだ。
あれから人造人間を倒してから3年の時が経つ。
この間に…新政府樹立と共に警察、軍が編成された。
しかしまだ力不足な為、微力ながら世界の平和のために戦った。
そして2年が経つ頃には、社会が安定し始めてようやく平和になった世界が戻った。
「でも今回の時間旅行でラストと考えた方が良いわよ…
フル充電で3年もかかってしまったし…
次にエネルギーが貯めるには10年単位かもね」
年々、エネルギーの溜まり方が遅くなっていってるから母さんの予測だとそれぐらい覚悟しないといけないのだろう。
「もし過去に行ったら自分が納得できるまで滞在してみるのも良いかもね～
まだ生きてる孫君や父さんと修行したり、悟飯君と平和を楽しんだりこっちではできない事してきたら?」
そう言われて僕は部屋に戻る為、ドアの方へ向かいながら
「…そ、そうだね報告がてら楽しんでくるよ」
多分、母さんに今の顔を見られたら心配されただろうから、なるべく平常心を保ちつつ返答する。
「あ、それと私は仕事あるから当日は立ち会えないけど大丈夫よね?」
「そうだね…母さんは忙しいし整備ぐらいはできるから心配しないで…」
あれから3年の間に自分は母さんにタイムマシンなどの知識と理論を教わり簡単な整備ぐらいならできるようになった。
だからこの1年は時間がある度にその手の本などを読む時間が増えていく…
しかし時空理論とかの話を聞くと、母さんの言い分だと…
『私は時空間移動のできる機械を作りたいだけで理論や事象を探究し

たい研究者じゃないからね！』
と言って殆ど本などで知識を得たに過ぎない…
母さんはああ見えて本能で動く人だから役に立たない難しい事は放ったらかしになる。
それでも本から得た知識だけど色々分かった事がある。
・タイムマシンで過去に行くだけでは歴史は変わらない
・歴史を変えた時点で分岐が発生して新たな世界が誕生する
・歴史を変えた存在は特異点となり様々な事象が発生する
つまり僕がフリーザ親子を始末した時点で歴史が分岐して新たな世界の道…世界線が現れる。
そして僕は特異点となり様々な事象が発生する…つまり分岐した世界には自分にかかわる事象が良い事悪い事が発生する可能性がある。
勿論これは時空間を移動したりタイムマシンに乗った人達の実体験では無く机上の空論の理論に過ぎないが…
それでも自分が特異点になったと実感してる。
特異点になったから父さんが亡くなり僕が産まれなかった…ある意味僕にとって悪い事象だ。
しかしドクターゲロが病気で死んで人造人間を作られなかったという良い事象も発生している。
だからもしフリーザ親子を僕が倒さずに孫悟空さんが倒したら分岐が発生せずに特異点にならなかった可能性がある。
親子を倒した後に僕が孫悟空さん達の前に現れて、未来の話をしても信じるか信じないかはわからないけど、超サイヤ人になれば信じてくれるだろうし薬で孫悟空さんが生き延びて歴史は変わるけど特異点にならないかもしれない。
所詮これも机上の空論に過ぎないが過去で僕自身が歴史を変える行為をしなければ随分と違う世界線になったかもしれない。
当然、今から再びフリーザ親子襲来の時に行って上記の事をしようとしても既に自分がいるからもう変えられないし、更なる分岐か…もしかしたら同じ自分が2人存在していたら世界が崩壊する可能性が

ある為、同じ世界に行けない。

行くなら…

「みんなによろしくね～」

「分かったよ…母さん…」

エイジ７６４年以降か…

もっと過去に行くしかない…

勿論、お礼を言いに行く事を最初考えてたが２年、３年と時間が経つ内にその考えが変わり始めた。

そう過去だ…フリーザ親子が襲来するよりも過去に行って人造人間そのものが存在したことすら孫悟空さん達が知らない世界になれば、歴史は分岐しない。

ドクターゲロを暗殺する…

ただの老人なら容易く暗殺できるだろう。

人造人間達…稼働しているか分からないから緊急停止装置は持っていこう。

万が一に備えて…

全てを排除すれば人造人間がいなかった世界となる。

分岐が無くなれば…

きっと父さんも死ななくて僕があの世界で存在できる可能性がある。

無意味かもしれない…

そんな事は分かっている。

しかし僕の中にある、どす黒い感情がどんどん時間が経つ内に溜まっていく…

この黒い感情そのままに原因である存在に叩きつけたい…

あのドクターゲロの居場所と研究所が分かっているなら排除した

い…
排除してこの前行った世界とは違う世界になれば…
母さんには嘘をつく事になるけど僕の心の中に閉まっておけば真実は知られない。

ある意味、今回の時間旅行は最後になる…
なら報告よりこっちの方が良いだろう。
父さんも自分のいない世界と言うのが更に行かなくて良いと段々と思ってしまう。
そして…

3日後…
僕は充電の終えたタイムマシンを庭に設置して最終点検を行う。
油断が無かったと言えば?になる…
仮に人造人間もいなくなって脅威など存在しないこの世界にあんな存在がいたなんて誰が想像できただろうか?

「お前がトランクスか?」
突然、背後からの声に驚く!?
「誰だ?!」
すかさず振り替えようとして立ち上がった瞬間!!
首に何かが巻き付き締め上げていく感覚が走る!!
「ぐあ!?な、なに、が…」
そこで初めて何者が僕に声をかけたかが分かる。
そこにいたのは人ではない…緑色の身体をした虫人間?これまで見た事のない生物が尻尾らしき物で僕を締め上げている。
「お、お前は…な、何者だ?!」
そう言いつつ身体が金色のオーラが輝き髪の毛は金色へと変身していく。
僕は超サイヤ人になって振り解こうと手に力を籠める!
…がビクともしない…

「ば、馬鹿な?ぐ、お前…お前は何者だ?」
気を探るがそこに存在していた虫人間から感じた気は在り得ない気だった…
「は?ば、馬鹿な…貴様のそ、その気は?」
表情変えずにその生物が喋りだす…
「私の名はセル…ドクターゲロ様が作り出した人造人間だ…」

最終話　セルに殺されるトランクス

「ば、馬鹿な？ぐ、お前…お前は何者だ？」
　気を探るがそこに存在していた虫人間から感じた気は在り得ない気だった…
「は？ば、馬鹿な…貴様の…その気は？」
　孫悟空さん？
　ピッコロさん？
　お父さん？
　フリーザ？
　何で…何でこの化け物から知ってる気を感じるんだ？
　表情変えずにその生物が喋りだす…
「私の名はセル…ドクターゲロ様が作り出した人造人間だ…」
「ドクターゲロ？人造人間？そんな馬鹿な!?研究所は破壊したはずだ?!お前は一体？」
　そうドクターゲロの研究所は人造人間破壊後、全て破壊したはずだ。
「ほう～残念ながら私はその研究所の地下深くの部屋で作られていたのだ…残念だったな」
　地下？地下にまだ研究所があったのか？
「さて研究所を壊したと言う事は１７号達も破壊したのは貴様か？」
「１７号？ああ、あいつらは僕が破壊した！」
「ほう～そんな力量があるとは思えないがどうやって破壊したのだ？」
「ぐっ…」
　答えられなかった…
　確かに自分の力では倒せなったのは間違いないから…緊急停止コントローラがあったから…
　緊急停止コントローラ！
　こいつが人造人間なら効くかも？
　確か胸のポケットの中に…

僕は尻尾で首を絞められながら片手を胸のポケットのコントローラを取り出して…
「ぐわあああ」
突然地面に放り出された！
「ぐ…あ、あ…」
何てことだ…
「何だ、これは？」
セルと名乗る人造人間の手にコントローラが握られていた。
「くそ！返せ!!!」
僕は咄嗟に剣の柄を掴んでセルに突っ込んでいく！
【はああ!!】
しかしセルが突っ込んできた僕を気合だけで空中に吹き飛ばす!!
「ぐあああああ!!!」
僕は吹き飛ばされながらも姿勢を戻すと…
「甘いな」
ガキン！
セルはそう言って、接近して両手を組んで振り落として、そのまま僕を地面に叩き落とす。
ドカン！
地面に大きなクレーターになりつつもさっきの吹き飛ばしで西の都から離れて、人のいない荒野に来てるのを知った。
ここなら全力を出せる!!
グサッ
「え？」
尻尾の先端がお腹に刺さっていた。
「質問を変えよう…お前は今から何処に行くつもりだったのだ？大分、集中していたから私が近付くのにも気が付かなかったようだが？…」
セルはさっきの乗り物に気が付いたようだった。
「あ、ぐ…あ、あれは…ただの…ひ、飛行機だ…」
尻尾が腹に刺さってから急速に力が抜けていくのを感じながらも

誤魔化そうとした…
「ほう～お前が飛行機か？空を飛べるのにか？」
何だ身体の力がどんどん…
「答えないとそこの町の連中を殺すぞ！」
セルは西の都に手を向けて…
「そんなことはさせない!!」
僕は怒りのまま尻尾を引き抜きながらセルに突っ込んでいく！
「ふん！」
セルに思いっきり体当たりした…が両手を交差して耐えて見せられた。
しかしコントローラを掴んでいた手が緩んだのか？
すぐさま手に持っていたコントローラを奪い取った。
「ほう～その身体でよく動くな」
余裕の笑み？なのかフォフォフォと笑いながら僕を見下している。
しかし手から奪ったコントローラのボタンをすぐさま押す！
【ガチリ】

停止したか？
「ん？何をしたかったのだ？」
セルが目の前に迫り拳で殴りつける!!
ドゴー！
「ぐわー！」
く…緊急停止コントローラが効かない…
僕は吹き飛ばされながらすぐ立ち上がって剣の柄を握りながら再び突っ込む！
剣を抜き放ちながらセルに叩きつける！
バキーン!!
折れた?!
「そんなもので!!」
そのまま蹴られて再び地上に叩きつけられる…
ドゴン!!!
!!

クレーターができて僕は身体を動かす事も出来なくなっていた。
「ぐ…」
それでも立ち上がろうと腕に力を籠めるが…
ドカ！
僕の頭に…セルの足が踏みつけれる。
「もう一度聞く…あの乗り物はなんだ？答えなければ町を消すぞ～良いのか？」
何でそんなに執着する？
そもそも何しにここへ来たんだ？
しかしこのままでは町の人達が…
「わ、分かった…あれは……タイムマシンだ…」
「ほう～タイムマシン？その名の通りだとすると時間を移動できる機械か？」
「（タイムマシンが何なのかを知ってるのか？）…そうだ！…それよりも何故お前の身体から孫悟空さんやフリーザの気を感じるんだ？…そしてお前の目的は何だ？」
「それは私の身体には様々な強者の細胞が組み込まれているからだ…孫悟空、ベジータ、フリーザ等の細胞を採取してな」
「そんな…どうやって…」
「ドクターゲロ様は超小型スパイロボットを各地に放っているからな～死んだり動けなくなったりした時にサンプルを回収するらしい…飛び散った血なんかも採取してるようだぞ」
「そんな物が？」
「いまだに未完成な私ができた後は細胞の採取はもうしてないようだが、戦闘のデータを取るためにそこに浮かんでいるぞ」
僕には見えなかったが、それなら考えられる…
そんな物があったなんて…

ん？
「未完成？」
言葉が漏れてしまった

「ああ～そうだ…私はまだ未完成なのだよ…私の目的は完全体になる事！その為には特殊な生命体を取り入れる必要があるのだ」
　得意げに自慢話を始めるセル
「特殊な生命体……生命…はあ！…ま、まさか…１７号達の事か？」
　人造人間１７号達の身体が人間ベースであったのを思い出す…
「ほう～察しが良いな！その通りだ！特殊な生命体である人造人間１７号１８号だ!!それを取り込む事で私は完全体になるのだ!!!」
「完全体だ…と…」
「ドクターゲロの話だと完全体になれば究極の生命体になることができるのだ!!」

　あ…
　し、しまった
　タイムマシンの事を話してしまった…
　こいつ、まさか…
「ふふふ…まあお前がどうやって１７号達を倒したのかは分からないがな
　タイムマシンを持っているのは知っていたのだよ」
「…」
　やはり分かっていたのか…
「さっき言ったろう～スパイロボットが偵察していたからな、情報としては知っていたがな…
　そしてこの世界に１７号達がいないのなら過去に行けばいいのだろう！
　お前がタイムマシンの整備を終えるのを待っていたのだよ！
　さてそう言う訳だ…トランクス…私の為に用意したタイムマシンで過去に行くとしよう」
「ふ、ふざけるな!!ぐおおおお！」
　僕は無理矢理再び超サイヤ人となってセルの足を払い除ける。
「トランクス…お前、今、自分の身体がどうなってるのか分かってないようだな？」

「何…え？」
僕の手はまるで病的なほどに？せ衰えてるように見えた…自分の手とは思えないほどに…
自分の手で顔を触るとまるで老人の様に皺が浮き出ていた。
「さっき尻尾で刺した時、ほんの少しだが生体エキスを吸わせてもらったからな」
生体エキスだと？
そんな…刺されていたのは、ほんの１０秒程度だったのに…
「さてどんな死に方が好みだ？かめはめ波で消されるか？おっとこんなところで撃てば街にあるタイムマシンが壊れてしまうか～」
「かめはめ波だと？」
「ああ～かめはめ波も元気玉も魔貫光殺法すら使えるぞ!!」
馬鹿な…こんな化け物が存在していたとは…
「よし決めた」
「ぐはー」
ギュルルルー
そういうと僕の首を掴みながら尻尾を巻き付けて…
そのまま空に飛びあがり移動する。

そしてタイムマシンの前に降り立つと…
「死ぬ前に言い残す事はないか？」
移動中に更に生体エキスを吸われ辛うじて生きてる身体のまま連れてこられた僕には最早、何も言う事は無かった。

ごめんなさい…こんなことになるなんて…人造人間を倒せてもまだ更に強力な人造人間が…セルと言う化け物が存在していたなんて…
僕は取り返しのつかない過ちをしてしまった。
しかもエイジ７６３年に着くように設定してしまった…
これも特異点になってしまった僕への罰なんだろうか？

グサリ
セルの尻尾が刺さり生体エキスを吸われていく…
「ごめ…なさ…な…僕…ぼ…の過……が…けて…い…」
口ですら普通に喋れなくなっていく…
母さん…
ごめん…な…さ……

そしてそこにはトランクスと言う青年が着ていた服だけが残されている
「さて…」
セルはタイムマシンのコクピットに入る為、身体を小さくして卵まで変化させる過程で腕を伸ばしスイッチを押す。
キャノピーが閉じていく間にセルは卵となっていた…
自動的にタイムマシンは空中に上がり、時空間移動の為に消え去った。

エイジ７８８
世界は人知れずに脅威が去り、この世界唯一の戦士が消えた…
この事実を知る者は誰もいない…

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ　残されし世界と始まる世界

手紙を読み終えた女性は力が抜けたように椅子に座りつつ…

・自分が特異点になった事

・父になる予定のベジータも死んで、トランクスの産まれてなかった世界になっていた事

・本当の事を言わなかった事

手紙には…ごめんなさい…と綴られていた。

「本当、馬鹿な子よ…1人で…ごめんね…トランクス…」

この手紙を読めたと言う事は…トランクスの身に何かあったのだろう事は分かる。

そして彼女はこの世界でとうとう1人となってしまった。

彼女の嗚咽と後悔は長く続いていく……

死ぬまで…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

地中にて…

タイムマシンで過去に来て何年になるか…

まだ成熟するまで時間がかかるが…

その時まで…

今は…

眠るとき…

セルは知らない…

特異点であったトランクスを殺してタイムマシンを奪い、この時代に来た事により自らが特異点になった事で新たな分岐が発生した事…

自らのその力の存在によってその分岐は歪み始めた事…

またタイムマシンがこの世界に一時的とはいえ、何度も2台存在した事による特異点の力が増していく事を…

そしてその特異点の力の増大はセルにとって良い事象と悪い事象が増していく事を…

セルにとっての良い事象

・ドクターゲロが病気で死ななかった事

・人造人間１７号、１８号の２人の戦闘力が増大した事

・人造人間１９号が想像以上の性能と忠実な部下になり右腕として力を発揮した事

・ゲロは１９号の完成により自らを人造人間に改造させた事

・セルの戦闘力はこの事象により本来、想定以上の力が発揮された事

セルにとっての悪い事象

・トランクスがフリーザ親子を殺す事で発生する分岐を消失させた事

・ベジータが修行中の怪我で死ななかった事

・人造人間１７号、１８号の２人の力が増したが心は穏やかになった事

・人造人間１６号の戦闘力が増大した事

・ピッコロが生き延びて神様と合体（元のナメック星人に戻る）した事

・デンデが新しい神様になる事

・ドラゴンボールが復活する事

・地下研究所に眠るこの次元のセルの幼体を処分される事

・孫悟飯が孫悟空との修行によって覚醒して天敵となる事

セルはまだ知らない…

特異点の力の増大は自らの戦闘力を強大に上げる事象を増やしたが、悪い事象は倍に増えていていく事を…

そしてそれを知らぬまま新たな分岐は未知の世界線となって進んでいく…

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ピッコロでもない神様でもない…ただのナメック星人とセル（第１

形態）が対峙している。
そこへクリリンとトランクスが到着する。
「や、やっぱりピッコロだ！神様と合体したんだよ!!
あ、あっちのヤツは…」
「多分、あいつだ…！例の抜け殻から出た!!」
『トランクス!!!
何故あいつが……そうか！あいつタイムマシンでこの時代にも…！
…ふん…馬鹿な奴だ…未来で私に殺されてこの時代でも殺されるとはな…』
何も知らないトランクスと何もかも知ってるセルが再び出会う…

Ｆｉｒｓｔ　Ｔｒｕｎｋｓ　完